

俳句

兼崎地橙孫

かねざき ちようそん

下関市
(1890~1957)



【著作】

- 『觸目皆花』（昭和5・人生創造社）
- 『地橙孫句抄』（昭和33・地橙孫句抄刊行会）
- 『清明の道』（昭和50・地橙孫著作刊行会 ほか）

【関連情報】

辞世の句「今日の日を包みて了へぬ花芙蓉」により、9月3日は「芙蓉忌」と命名される。地橙孫の俳書は周南市立中央図書館に寄贈されている。

兼崎地橙孫は、父親の転勤により山口市に生まれる。家は代々徳山藩に仕えた家柄で、祖父茂昌は橙堂と号し、詩文をよくし、著書に『橙堂詩文遺稿』があり、徳山藩に西洋流の砲術を教えていた。父茂樹（号地外）も晩年『橙堂遺稿補遺』（徳山藩史稿）を編纂、出版している。

地橙孫の俳号は、父の号から「地」を、祖父の号から「橙」をとって「地橙孫」とした。

中学生のころから俳句に親しみ、初め青木月斗選『大坂新報』に投句、入選。その後河東碧梧桐選の『日本及日本人』に転じ、爾來碧門下として終始した。

十七歳のときから六十七歳の他界までの一生を通じて五十年間、終始一貫俳句に精進し、一万句以上作っている。

地橙孫には自選の句集「人」がある。これは初期の『日本俳句』の頃から『海紅』の頃と『生活派』といった頃まで、明治四十年（一九〇七）から昭和十六年（一九四一）までが上巻、次は中期になって七音の定型に還った『清明集』の頃、昭和十七年（一九四二）から昭和二十五年（一九五〇）までが中巻、あとは後期になって昭和二十五年（一九五〇）十二月から昭和三十年（一九五五）十二月までが下巻、さらに「人に継ぐ」という題が付いて、昭和三十一年（一九五六）以後の分が一冊、この四冊が地橙孫自筆の家蔵集であるが、これにより、地橙孫の句歴を知ることができる。

地橙孫は理論家で、俳論『清明の道』を書いているが、「清明句」ということを自己の俳句の基本にした。

「清明句は、表現されたものに気品がただよっていなければならぬ。清明の道は、気品あふれる作品を表現することにある。気品とは、単なる現実ではない。人類の心に存する理想であり憧れといつてよい。あこがれが如実に表されたとき、これに接して慰め、魂の癒しを享受するのである」と語り、晩年は気さくに近隣の句会に出席していた。

地橙孫は書もよくした。中村不折に学んだ六朝書体で揮毫した石碑を県内各地に残している。

（文・田村悌夫）



晩年を過ごした舞車庵（周南市舞車）



杉立や春のいなづまあまたたび 地橙孫

墓碑（周南市大迫田）

兼崎地橙孫 年譜

（提供・田村悌夫）

3月27日、山口市道場門前に父茂樹、母東女の長男として生まれる。本名理蔵。

山口小学校に入学。父の転勤（高田商会勤務）のため東京、横浜、門司と転校。

4月、県立豊浦中学入学。胸部疾患のため、五年一学期で退学。

この頃から俳句に親しむ。青木月斗選『大坂新報』に投句入選。

9月、第一次「白川及新市街」を創刊、主宰。句及俳論を発表。

11月、『海紅』創刊。碧梧桐、一碧樓、六花らと同人になる。

3月、『海紅』創刊。碧梧桐、一碧樓、六花らと同人になる。

4月、山頭火を熊本に迎える。6月、五高卒業。9月、京都帝大法科（独法科）入学。

巨理寒太と交遊、11月、第二次「白川及新市街」発刊、9年5月終刊。

3月、京大卒業、帰郷。5月、上京、第一師団軍法会議構成員並理事試験補拜命。

9月、葛城恵美子（俳人・紀伊粉河寺出身）と結婚。

3月末、官を辞し、東京で弁護士開業。11月、下関市に移住。馬関毎日新聞社主幹就任。在職中、俳句、短歌、小説に親しみ滝井孝作に就いて創作を試む。文芸誌『海峡』を企画、発行し、中本たか子だけが世に出る。後に吉田常夏の『燭台』に引き継がれる。

春、馬関毎日新聞社辞職、下関で弁護士開業。山頭火ら俳人多数往来。

9月、随筆集『觸目皆花』を人生創造社より刊行。

11月、黒田忠次郎が『生活派』創刊、地橙孫も同人として参加。

2月、『日本俳句』発足参加。12月、『新日本俳句協会』評議員。

2月、『新日本俳句協会』解散。『日本俳句』も廃刊となる。

定型俳句に復帰、泉太郎、広江八重校と『清明集』を回覧。

4月、山口県弁護士会に就任。7月、関門空襲により罹災。

7月、徳山市（現・周南市）帰住、引き続き弁護士を継続。

3月、『通草』第一句集刊行（謄写）。5月より大患、病臥半年に及ぶ。

11月、『通草』第二句集上梓（謄写）。

県内の新傾向定型派の大結集を企画、『清明』を主宰。体調不良で第二号で廃刊。

9月3日、狭心症に喘息を併発して永眠。

昭和23(一九四八)年	六歳	明治23(一八九〇)年	三三歳
昭和29(一九〇四)年	一二歳	明治29(一八九六)年	三四歳
昭和35(一九一〇)年	一七歳	明治35(一九〇二)年	四〇歳
明治40(一九〇七)年	二〇歳	明治40(一九〇七)年	四一歳
明治43(一九一〇)年	二二歳	明治43(一九一〇)年	四二歳
明治44(一九一一年)	二二歳	明治44(一九一一年)	四二歳
明治45(一九一二年)	二三歳	明治45(一九一二年)	四三歳
大正2(一九一三年)	二四歳	大正2(一九一三年)	四四歳
大正3(一九一四年)	二五歳	大正3(一九一四年)	四五歳
大正4(一九一五年)	二六歳	大正4(一九一五年)	四六歳
大正5(一九一六年)	二七歳	大正5(一九一六年)	四七歳
大正8(一九一九)年	二九歳	大正8(一九一九)年	四九歳
大正10(一九二一年)	三一歳	大正10(一九二一年)	五一歳
大正11(一九二二年)	三二歳	大正11(一九二二年)	五二歳
大正13(一九二四年)	三四歳	大正13(一九二四年)	五四歳
昭和5(一九三〇)年	四〇歳	昭和5(一九三〇)年	五五歳
昭和6(一九三一年)	四一歳	昭和6(一九三一年)	五六歳
昭和15(一九四〇)年	五〇歳	昭和15(一九四〇)年	五七歳
昭和16(一九四一年)	五一歳	昭和16(一九四一年)	五八歳
昭和17(一九四二年)	五二歳	昭和17(一九四二年)	五九歳
昭和20(一九四五年)	五五歳	昭和20(一九四五年)	六二歳
昭和21(一九四六年)	五六歳	昭和21(一九四六年)	六三歳
昭和22(一九四七年)	五七歳	昭和22(一九四七年)	六四歳
昭和23(一九四八年)	五八歳	昭和23(一九四八年)	六五歳
昭和26(一九五一年)	六一歳	昭和26(一九五一年)	六七歳
昭和32(一九五七年)	六七歳	昭和32(一九五七年)	六七歳

《没後》

昭和33(一九五八)年
昭和50(一九七五)年
昭和57(一九八二)年

京淋しき灯にも落葉や橋は何
佇つ鶴の括り桑より高からず
地を過ぐるもの大いさ春の翳
萬緑に産み落せるは白き卵
泳ぎ出て波の青さのほかを見ず
蚊帳吊りておのが淋しき紛れけり
秋山の奥に不思議もあらぬかな
白木槿秋の草花何々ぞ
恍惚と入目を浴びつ野の案山子
持ち物の傘一本や枯野ゆく

（自選句集「人」抜粋
昭和26年3月24日発行
自家版より）